

先天性股関節脱臼

(予防・早期発見が大切)

鹿山整形外科医院

鹿山富生 先生

赤ちゃんの頃から股の関節が外れている状態を、先天性股関節脱臼といいます。治療せず、成長し歩くようになると関節の間の軟骨が異常にすり減り、主に中高年以降に痛くて歩行困難になります。その治療には人工股関節の手術が必要です。しかし人工の関節には耐用年数があり、いずれ入れ替えの手術が必要で、体に大きな負担となります。ですから赤ちゃんの頃に発見し、脱臼を元に戻してあげることが大切です。

けがの脱臼と違い、痛みがなく家庭ではなかなか異常に気づきません。早期発見には小児科や産婦人科の先生による定期検診をしっかり受けることが大切です。1カ月検診や3カ月検診で疑われることが多く、また、治療もこの頃までに開始するのが理想です。家庭で簡単に診る方法としては、赤ちゃんを仰向けにし、股がしっかり開いて、いわゆるM字型になっていれば一安心です。片方もしくは両方の股の開きが悪くM字になっていなければ脱臼が疑われます。

正しいオムツとその当て方が脱臼の予防に欠かせません。オムツは現在市販されている紙オムツで問題ありませんが、腰の部分のテープをきつく閉めすぎず、足の運動が自由にできるようにします。抱き方は、赤ちゃんを正面で抱き股が良く開くように抱っこします。また、頭が片方を向く斜頸という状態が股の開きを悪くしている場合もあり、生後早い時期ではこの斜頸を治すだけで股の開きが良くなってしまいう場合もあります。治療は専用のバンドを1、2カ月着けます。これは痛みも苦痛もなく脱臼を元に治す働きがあり、このバンドでほとんどは直ってしましますが、だめな場合には入院や手術が必要な場合もあります。いずれにしても早期発見が一番です。少しでも赤ちゃんの股の開きがおかしいと思ったら、最寄りの整形外科医の診察を受けることをお勧めします。